

婦人雑誌『新女界』の記事および執筆者の学歴・キャリアからみる知識人層の女子教育観と学校選択

著者	佐々木 啓子
雑誌名	電気通信大学紀要
巻	29
号	1
ページ	290107
発行年	2017-02-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1438/00008420/

婦人雑誌『新女界』の記事および執筆者の学歴・キャリアからみる 知識人層の女子教育観と学校選択

佐々木 啓 子

Influences of *Shinjokai* and its Elite Authors on Women's Education in Japan

Keiko SASAKI

Abstract

Shinjokai [New Women's World], a journal published from 1909 to 1919 by the Hongo Church, was authored by distinct members of the intelligentsia of the day and read by women both Christian and non-Christian. The journal molded its readers' views of education for women and affected their school choices. This article first illuminates *Shinjokai* authors' highest educational attainments and their distinguished careers, and then illustrates how they, together with their inspired female readers, propagated women's education in Japan.

Key Words : *Shinjokai* [New Women's World], women's education, educational attainments and careers, the intelligentsia and their school choices

はじめに

これまでに筆者は、戦前期の女子高等教育についての制度的、組織的、社会学的研究を行ってきた。¹ また、高等女学校からの進学者の研究、さらには、主に中上流階級の階層文化と女子教育の関連については実証的な研究成果を発表してきた。²

こうした研究によって、戦前期に女子高等教育を享受できた階層が、明治初期以降の開明的知識人の系譜につながっているということが、次第に明らかになってきた。³ また、そうした知識人たちは、日本が開港に踏み切った以降、主にアメリカの海外伝導師会（アメリカンボード）が派遣した宣教師やその夫人、さらには女性宣教師たちを通じて、西洋的文明や文化に接触した、開明的な人々に源流をもつことは多くの研究でも明らかにされて

いる。⁴ 日本においてキリスト教の布教が禁じられていた1873（明治6）年までは、西洋文化を求めて、多くの男性そして女性が、横浜と東京築地の外国人居留地に押し寄せ、英語を習得しながら、西洋的知識や生活様式、価値観、そして、必然的にキリスト教の教えも理解するようになったのである。

本論では、以上の研究成果に加え、新たに月刊誌『新女界』の記事内容と、その執筆者の学歴やキャリアの分析を試みることによって、『新女界』の発行主体であった本郷教会とその知識人たちの、女子教育観および明治末期～大正初期の学校選択について詳細に検討したい。⁵

（なお、本文中、表および引用文の旧かな・旧字は新かな・新字に筆者が変換した。また、引用文中の「・・・」は途中省略を示す。）

Received on September 26, 2016.
共通教育部総合文化部会

¹ 佐々木啓子『戦前期女子高等教育の量的拡大過程』東京大学出版会、2002年。

² 佐々木啓子「戦前期女子ミッション・スクールの進学構造—青山女学院を中心として」『第56回教育社 学会発表要旨集録』、2004年、310-311頁。

³ 佐々木啓子「近代日本における都市中上流階級の階層文化と教育」『電気通信大学紀要』第24巻第40号、2012年、19-29頁。

⁴ 小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師—来日の背景とその影響』東京大学出版会、1992年。

⁵ 大正期に新中間層を中心に小学校受験競争が始まった経緯については、小針誠『<お受験>の社会史』世織書房、2009年、および、同『<お受験>の歴史学』講談社選書メチエ、2015年に詳しい。

1. 欧化主義から近代的女子高等教育の確立期と『新女界』⁶

明治1885（明治18）年という欧化主義の時代に、明治女学校の関係者を中心として、わが国初の婦人雑誌『女学雑誌』が創刊された。この雑誌は、鹿鳴館に象徴される華やかな欧化主義の時代に刊行されたため、広く女性たちに西欧的教養や文芸を広めるという役目も担って読者層を広げていった。『女学雑誌』は、巖本善治が校長を務める明治女学校の教員らが、欧米文学の紹介や翻訳を手がけ、さらには新鋭の小説家に執筆を依頼するなど、文学的趣向が強く、後年の『文学界』に続く雑誌と位置づけられ、島崎藤村や北村透谷を世に出した意義は大きかったといわれている。また、相馬国光をはじめとして、女性も取り込んだ日本の知識人界を形成し、違うことなく文芸の創出に寄与した、啓蒙的婦人雑誌であるといえよう。⁷

しかし、発行母体であった明治女学校が、度重なる火災や主要教員の異動、さらにはその学校運営において、新しい近代的な教育制度に遅れをとり、本格的な女子の高等教育を目指す日本女子大学校や女子英学塾の創設により、生徒の要求を捉えきれなかったなどの要因が重なって廃校となり、その後『女学雑誌』も惜しまれながらも廃刊となった。その数年後に、『新人』の「兄妹誌」として『新女界』が、本郷教会の牧師であった海老名弾正の提唱によって創刊された。その執筆者としては、海老名弾正・みや夫妻、安井哲子（てつ）、宮川寿美子（スミ）、吉野作造など、本郷教会の会員たちであった。特に安井と宮川は、官立の女子高等師範学校出身で、政府から英国留学を命じられ、帰国後は日本の女子高等教育の確立に寄与した女子教育のパイオニアであった。『新女界』は女性執筆者を多く擁し、1909（明治42）年4月から、1919（大正8）年2月に終刊を迎えるまでの約10年間、日本の女子高等教育の草創期に、キリスト教信者のみならず、知識婦人や女学生、女子師範学校関係者を中心として、地方都市や朝鮮、台湾、中国、アメリカ、ハワイなど海外にも読者層を広げ、毎月約2,000部を刊行していたと推定されている。⁸ この数は、明治期の『女学雑誌』

や、大正期の主な婦人雑誌の発行部数である、数万部～20万部⁹に比べると極めて少部であり、大衆的な婦人雑誌とは趣を異にしていたものと思われる。¹⁰ しかし、この雑誌の評価は高く、明治末期の『婦女新聞』には、当時の婦人雑誌『新女界』『婦人の友』と並べて『新女界』は、花に譬えて「蘭の花」とし、次のように紹介されている。「美しい色はありませんが、気品と香とを認めます。人なら自信力の強い女子教育家でしょう」。¹¹

ところで、この『新女界』が創刊された1909（明治42）年は、日露戦争後の戦争未亡人が社会問題化し、職業資格を求めて、女子（津田）英学塾、東京女子医学専門学校、共立女子職業学校や女子美術学校への入学者が激増した時代であった。さらにそれらの学校が「専門学校令」によって高等教育機関としての地位を獲得し、さらに「中等教員無試験検定」の資格が付与されたことによって、教員免許状を求める女性たちが、女子（津田）英学塾や日本女子大学校に押しかける事態となっていた。また、東京女子医学専門学校でも、1908（明治41）年に初めて医術開業試験に合格者を出し、女子高等教育が一層、確立していった時期であった。一方で、官立としては唯一の女子高等教育機関として、幼児教育から高等教育まで、まさに日本の女子教育の総本山といわれていた女子高等師範学校が、日本全国から優秀な女性を集めていたが、1908（明治41）年に、さらにもう1校、奈良に設立されたことにより、東京女子高等師範学校、奈良女子高等師範学校として、官立の中等教員養成機関もようやく整備された頃でもあった。そして、同時期後半には、日本初の教育会議である「臨時教育会議」が開催され、女子に大学教育が必要か否かの議論が繰り広げられていた。

このように、日本の女子高等教育がまさに拡大しようとするなかで『新女界』は終刊となるのだが、それは主筆であった安井哲子が、1918（大正7）年4月、東京女子大学の設立にあたって、学長となる新渡戸稲造の強い要請を受け、同大学の学監に就任したからであった。しかし、本格的な女子大学の設立によって、女子教育界に一区切りがついた時期であったともいえる。

前述のように『新女界』は『女学雑誌』の後続誌とい

⁶ 『新女界』創刊の経緯については、一部、次の要旨において言及している。佐々木啓子「進学名門校「女子ミッション・スクール」の歴史社会的分析—都市市民層の教育期待に着目して—」『日本教育学会第68回大会発表要旨集録』2016年、12-13頁および、同学会大会の口頭発表。

⁷ 『女学雑誌』の欧化主義については、岡田章子『「女学雑誌」と欧化』森話社、2013年に詳しい。

⁸ 同志社大学人文科学研究部編『「新人」「新女界」の研究』人文書院、1999年、27-28頁。

青木次彦『「新女界」解説・総目次』友愛書房、1975年、2頁。

⁹ 近代女性文化史研究会『大正期の女性雑誌』大空社、1996年、8頁、表2による。

¹⁰ 明治・大正期の婦人雑誌の研究書としては、近代女性文化史研究会編『婦人雑誌の夜明け』大空社、1989年、同『大正期の女性雑誌』大空社、1996年などを参照。

¹¹ 『婦女新聞』明治45年5月24号、但し、中嶋邦「近代日本における婦人雑誌、その周辺」近代女性文化史研究会編『婦人雑誌の夜明け』大空社、1989年、12-13頁より引用。

(表1) 『新女界』の主な執筆者の執筆回数、学歴、留学・渡航歴、肩書き

執筆者名	執筆回数	学歴	留学・渡航歴	肩書き
海老名弾正	144	熊本洋学校		本郷教会創設、熊本英学校、熊本女学校創設、同志社総長
海老名みや子	192	熊本洋学校、同志社、海岸女学校(青山女学院)	アメリカ(ピッツバーグ世界キリスト教徒大会)日本人代表、機関派遣	キリスト教婦人活動家 キリスト教連合婦人会会長
安井哲子(てつ)	128	女子高等師範学校	イギリス(ケンブリッジ大学、オックスフォード大学)官費留学	東京女子高等師範学校教授、東京女子大学2代学長
宮川(大江)寿美子	8	東洋英和女学校、女子高等師範学校	イギリス(バケイン専門学校、ベドフォード大学)官費留学	東京女子高等師範学校教授、東京家政学院長
辻(小此木)まつ	7	女子高等師範学校・女子英学塾選科	アメリカ(マウント・ホリヨーク大学)、イギリス(オックスフォード大学)官費留学	東京女子高等師範学校教授、津田英学塾長代理
三谷民子	19	女子学院	アメリカ(ノースフィールド大学)、イギリス(オックスフォード大学)私費留学	女子学院3代目校長
植村環	1	女子学院	アメリカ(ウェズレー大学、ニューカレッジ)	女子(津田)英学塾教師、東京女子大学講師、YWCA会長
井深花	10	神戸英和女学校	アメリカ(マウント・ホリヨーク大学)	神戸女学院 理化学教授
河井道	4	北星女学校	アメリカ(プリンマー大学)	女子(津田)英学塾教頭、東京女子高等師範学校講師、YWCA幹事、恵泉女子学園創設
志立たき子	13	英国婦人の家庭教師	イギリス	東京YWCA会長
元良よね子	32	海岸女学校(青山女学院)		
某夫人(金森小壽)	15	神戸英和女学校		神戸英和女学校教師、山陽女学校創設、女子高等師範学校、及び東京音楽学校非常勤講師(倫理学)
新渡戸稲造	8	札幌農学校	アメリカ(ジョンズ・ホプキン大学、ハレ大学)	札幌農学校教授、東京女子大学長
吉野作造	58	東京帝国大学法科大学	アメリカ、イギリス、ドイツ、清国	東京帝国大学法科大学教授
谷津直秀	35	東京帝国大学理科大学動物学科	アメリカ(コロンビア大学Ph.D)	東京帝国大学理学部教授
内ヶ崎作三郎	21	東京帝国大学文科大学英文科	イギリス(オックスフォード大学、マンチェスター学院)	早稲田大学教授、代議士
帆足理一郎	8	東京法学院	アメリカ(南カリフォルニア大学、シカゴ大学大学院)	早稲田大学教授
山下 清	7	第一高等学校、京都大学医科大学		医師
金子魁一	9	東京帝国大学		東京女子医学専門学校教授(整形外科)
高田耕安	14	帝国大学医科大学	ドイツ(ベルリン大学)	帝国大学医科大学、南湖院(茅ヶ崎のサナトリウム)院長
宇佐美けい子	3	女子高等師範学校		愛知県名古屋高等女学校教師
小橋三四子	21	東京府立第一高等女学校、日本女子大学校	アメリカ(コロンビア大学)	編集者(『新女界』『家庭週報』『読売新聞』婦人付録など)

『日本キリスト教歴史大事典』、『幕末明治海外渡航者総覧』第1～3巻、等を参照して作成。

う意味合いもあったが、本郷教会が発行主体だったことで¹²、キリスト教者のための女性雑誌と目されていたこともあり、同志社大学人文科学研究所が共同研究として分析するまでは、この雑誌の意義が十分に理解されてこなかったといえる。しかし、明治期以降の女性教育家、医学・看護関係者、芸術家には、多くのキリスト教者が含まれていることから、欧化主義の教育から近代的な学校教育への移行過程の分析には、欠くことのできない婦人雑誌であると考え、本論であらためて分析することとした。

2. 『新女界』執筆者の学歴とキャリア

『新女界』が『新人』の妹版として刊行されたことから、『新女界』執筆者の多くは『新人』執筆者と重なっている。しかし特徴的なこととしては、主要な執筆者に女性、それも教育者や著名な女性に限らず、『新人』執筆者の夫人や、本郷教会の女性会員が多く登用され、さらには夫婦で執筆していることである。(表1)は『新女界』の主な執筆者の執筆回数、学歴、留学・渡航歴、肩書きである。執筆者の大多数が留学や渡航歴があり、特にこの時代にあつては、女性が高等教育を受けていることや、官費留学以外にも私費留学や機関(教会関係)留学者が

¹² 青木次彦『『新女界』解説・総目次』友愛書房、1975年、1-2頁。

多く含まれていることは驚異的であるといえよう。なかでも女性でこの当時、海外の大学に入学が可能であったのは、女子高等師範学校関係者で文部省からの派遣留学にはほぼ限られていたが、『新女界』の女性執筆者には少なからず海外の大学への留学者が認められるのである。

勿論、雑誌の執筆者であるので、概して高学歴であることはいわば当然であるが、この表でみる限りにおいて『新女界』の執筆者達は、その学歴が一頭地を抜いている。

そもそも『新人』『新女界』の発行主体であった本郷教会は、帝国大学、高等師範学校、早稲田大学、東京高等商業学校、東京女子高等師範学校などの学生・生徒が集まる「学生教会」と呼ばれていた。『弓町本郷教会百年史』によれば¹³、1904（明治37）年からの4～5年は、特に学生の教員が多く、学校別グループがそれぞれ学校ごとに特別集会を持ち、また学校間の交流もあった。女子学生も多く、特に、東京女子高等師範学校文科の卒業生20名の中、15名がキリスト教者で、その中の11名が本郷教会員であった年もあった。太田雅夫¹⁴によれば、1904（明治37）年、会員総数380名（男276名、女104名）であり、職業別では、実業家（男48名、女1名）、会社員（男6名）、医者（男9名、女2名）、看護婦（女12名）、美術家（男3名）、教育家（男12名、女10名）、官吏（10名）、国会議員（男1名）、弁護士（男3名）、著述家・記者（男6名）、伝道（男4名）、学生（男141名、女27名）、無職（男6名、女38名）、未調査（男33名、女15名）、総計（男282名、女105名、計387名）であった。

学生の内訳では、東京帝国大学23名、高等師範学校男子部11名、同女子部12名、高等商業学校8名、高等工業学校5名、早稲田大学17名、第一高等学校4名、京都大学2名、福岡医科大学1名、その他、男70名、女15名であった。¹⁵ 会員のうち学生、なかでも東京帝国大学と東京女子高等師範学校生が多く、このために、本郷教会は「書生の教会」とも称せられていたのであった。この本郷教会の『月報』を月刊雑誌にきりかえて『新人』が創刊されたのは1900（明治33）年7月であった。会員である学生が卒業して全国的に移動することが多く、その連絡を兼ねてのことであった。『新人』編集協力者の中には、「報知新聞」記者の酒井恒夫、出版業を営む長老の秋元尚寿、東大生の三沢糾、渋谷千之助、中村和之雄に、東京大学基督教青年会の内ヶ崎作三郎、栗原基、深田康算、一戸直蔵、吉野作造、小山東助、小松武治が

加わり、編集に協力した。¹⁶

学校別に本郷教会員のその後のキャリアをみていくと、東京帝国大学卒業生としては、吉野作造はドイツ留学後に東京帝国大学教授、内ヶ崎作三郎は早稲田大学教授、大泉哲は法科大学のち京都帝国大学を卒業後に安田銀行各支店長・取締役、三枝治郎は卒業後「万朝報」記者、鈴木文治は卒業後「朝日新聞」を経て友愛会を結成した。他にも妹尾秀実は日本女子大学教授、高橋嘉四郎は広島高等師範学校教授、山内保（医学博士）はウィーン公使館勤務、岡慶治は東京地裁判事、平野亮平は大蔵省に入省し、各地の専売局長を歴任後に専売局長官、草間秀雄は大蔵省に入省し、朝鮮総督府財務局長、相原一郎介は内務省宗教局から文部省宗教局に異動して初代宗務官、岡正路は会計監査院に入り会計監査院部長、寛正太郎は鉄道省に入省、鉄道省各局長を歴任し、鉄道事業視察のため欧米各国へ派遣され、後、東京市電気局長に就任して市電の速度を速めることに尽力した。¹⁷

東京女子高等師範学校卒業生としては、第1期生として、安井哲子は卒業後に同校助教諭、文部省留学生としてイギリスのオックスフォード大学などに留学、帰国後には同校の教授兼舎監、東京女子大学創設時の学監、新渡戸稲造の後を受けて2代目学長に就任した。小此木（辻）マツ子は、女子高等師範学校研究科および女子（津田）英学塾を卒業し、文部省留学生として渡英、帰国後は東京女子高等師範学校教授、津田英学塾教授および塾長代理を務めた。小川（塚本）はまは、後に青山女学院の副校長、野口幽香は東京の四谷のスラム街に双葉幼稚園を開設して生涯を幼児と保母の教育に捧げた日本の保育事業の先駆者である。¹⁸ これら女子高等師範学校の女子学生を指導していたのが雀部顕宜であった。彼は東大文科を卒業後に青山学院教師、長崎の東山学院教師などを経て、東京女子高等師範学校教授として東京に戻った。後に奈良女子高等師範学校教授、そしてドイツに留学し、同志社女学校教頭に請願されて就任した。¹⁹

医師・医療関係者として、高田畔安は1884（明治17）年に京都医学校を卒業後、大学予備門試験に合格して帝国大学医学部に入学し、1890（明治23）年に卒業し、医科大学附属病院に入り、ベルツ博士の助手となる。そして1896（明治29）年、東洋内科医院を創立、1899（明治32）年には神奈川県茅ヶ崎に南湖院を創設し、東洋一の結核療養施設として病院内での礼拝、クリスマス会、

¹³ 弓町本郷教会百年史委員会編『弓町本郷教会百年史』日本基督教団弓町本郷教会、1986年、64-65頁。

¹⁴ 『「新人」「新女界」の研究』人文書院、1999年、202-234頁。

¹⁵ 前掲『「新人」「新女界」の研究』204頁。

¹⁶ 同上、210-214頁。

¹⁷ 同上、214-216頁。

¹⁸ 『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988年。1088頁。

¹⁹ 前掲『「新人」「新女界」の研究』207-208頁。

絵画展示など結核患者の救済に生涯を捧げた。²⁰

女性としては、日本女医第1号の荻野吟子、前田園子という2人の女医がいた。前田園子は青山女学院と済生学舎を経て、医術開業試験に合格して医師となった。海外留学も経験している。²¹また、看護師になるために東大病院附属看護婦養成所に入所した堀（碧川）かた、は、本郷教会婦人部の同志看病婦会の中心的な看護婦であった。²²

芸術関係者としては、東京音楽学校の学生として岡村壮伍、東京美術学校の学生では有田四郎。有田は『新人』『新女界』の表紙や挿絵を担当した。なお、『新女界』の表紙や挿絵を担当した女子美術学校学生としては、鈴木憲子と栗原あやが本郷教会に入会している。弓町に女子美術学校があったため入会者も少なくなかった。教会で讚美歌の合唱指導をしていたのが、五嶋清太郎と村上直次郎であった。村上直次郎は、1884（明治17）年に同志社英学校予科を卒業し、東京大学で史学を学び、のちに東京外国語学校校長、東京音楽学校校長、台北帝国大学教授、上智大学総長を務めた。²³

高等商業学校出身者としては、わが国の会計監査制度の先覚者である木村禎橋、外交官としてメキシコ公使となった堀義貴、卒業後に三井物産に入社、戦後、池田内閣時代に国鉄総裁となった石田礼助がいた。²⁴

本郷教会関係者たちは高学歴、なかでも女子に対しては男子と同等の高等教育や海外留学、そして取得した学位によって女性が自立することを称賛する、極めて近代的価値観を共有していた集団であった。高等教育機関が著しく東京に集中していた明治期において、帝国大学生や女子高等師範学校生と教師たちの、教会を拠点とするネットワークが、現在の文京区地区を中心として形成されたのであった。この本郷教会会員を中心とする知識人たちは「新中間層」や「中上流階級」として分析されてきた集団と重なる部分はあるものの、P.ブルデューのいうところの、ある文化を共有し、経済界、政界、教育界、医学界、文化界での「格が上の」²⁵社会的地位にあるか、将来的にそれが約束されている人々であった。彼らは、筆者が研究対象としている都市市民層²⁶の主体として位置づけられるものであるが、より一層、高学歴であり、その学歴が際立っている、特別の知識人層であった。

3. 『新女界』のオピニオン・リーダーたち

3-1. 時事問題担当

本郷教会の会員であり、帝国大学基督教青年会のメンバーであった吉野作造は『新人』の主要な執筆者であったが、『新女界』の創刊にともない、その政治学的立場と欧州留学の知見から、国際政治に関する時事問題を数多く論じている。男性と同じような国際感覚を女性にも求めている感があり、当時の婦人雑誌としては異色の論説を展開しているといえる。以下は、吉野が『新女界』で執筆した時事問題の全題目をまとめたものである。

(表2)

吉野作造
「清国婦人雑話」「家庭に於ける修養」「独逸見聞記」「時事其折々 此度の議会に於ける問題 工場法案 外米輸入税廃止案」「時事其折々 我国近時の政変 アメリカとコロンビアとの和睦」「時事其折々 民衆騒動の政治上の意義 パナマ運河通過の時間十時間」「時事其折々 島国根性の打破」「時事其折々 奥地利皇儲殿下の暗殺」「時事其折々 欧州戦争の経路」「独逸の国民性 各国傷病兵の救助」「ローマ法王の更替」「拳国一致の美談」「今月行わるる総選挙に就いて」「時事其折々 日支交渉」「婦人の政治運動」「日支交渉の解決」「今度の議会」「日記の中から」「現戦争の二大特色」「戦局バルカンに及ぶ」「バルカン戦局の観察」「今回の議会に於ける外交問題」「南支那の動乱」「最近の政況」「羅馬尼王母殿下」「満韓の旅」「袁世凱及其遺族」「戦後に対する日本の準備」「東西戦局の形勢」「何ゆえに伝道するか」「東西最近の形勢」「支那の特使派遣中止問題」「米独の国交断絶」「内外昨今の形勢」「総選挙の道德意義」「書齋にて客と」「戦後の要求に応じて立ち得るや」「復辟運動の失敗」「最近の戦局に就いて」「土耳其の政変」「戦乱中に閃く正義の光」「露独単独講和の真相」「英国に於ける婦人参政権運動（一）～（五）」「チェックスロバックとは何ぞ（時論）」「新大統領徐世昌を中心として（時論）」「独逸の内情に関する観察（時論）」「政治学の立場より男女の同権を述ぶ」

3-2. 『新女界』主幹：海老名弾正牧師の論旨

この雑誌が、本郷教会牧師である海老名弾正の提唱によって創刊されたことより海老名は、その主幹としての立場から、そしてキリスト教者としての立場で、毎号、巻頭言を執筆するが、全般的にあってそれほど宗教色が強いとは言えない。むしろキリスト教的な博愛を基調とした、女性向けの啓蒙的な論を展開している。以下は『新女界』第1巻1号に掲載された海老名弾正の「発刊の辞」

²⁰ 前掲『弓町本郷教会百年史』254-255頁。

²¹ 同上、257-266頁。

²² 前掲『「新人」「新女界」の研究』208頁。

²³ 前掲『弓町本郷教会百年史』248頁。

²⁴ 前掲『「新人」「新女界」の研究』219-220頁。

²⁵ P.ブルデュー/立花英裕訳『国家貴族』I, II, 藤原書店, 2012年。

²⁶ 都市市民層の定義については、佐々木啓子「進学名門校「女子ミッション・スクール」の歴史社会的分析—都市市民層の教育期待に着目して—」『日本教育社会学会第68回大会発表要旨集録』2016年、12-13頁および、同学会大会の口頭発表にて詳しく論じた。

の抜粋である。この『新女界』が目指す方向性が明確に示されている。

「発刊の辞」：海老名弾正

「・・・是れ固より汝が忽せにすべからざる所なれども、汝の使命は更に積極的方面に打って出づべきものありと思はる。新しき麵麩は日本の女学界に混入せられたり。此麵麩は日本の女学界をかきみだす恐るべき勢力なり。苟も欧米の思想が注入せらるる以上到底此混乱は免るべからず、さらば欧米の思想は果たして悪なりやといふに、断じて然からず。・・・汝は滔々たる天下の女流に反抗して、更に一頭地を抜き、天来の寵靈に頼り、・・・朝日清らかに照らす極東の天地に新女界を開拓せんは汝天與の光榮たらずんばあらず。・・・」(『新女界』第1巻1号, 1909(明治42)年4月, 1-2頁。)

さらにこの第1巻1号では、「東西家庭の特徴」という題目で、第1巻3号では「近代における我国女性の自覚」と題して、女性もまた広く海外に視野を広げることの重要性を説いている。

「近代における我国女性の自覚」：海老名弾正

「近頃日本の女子の状態が余程変って来たが、私はこれが原因の一として基督教主義の文明を数えざるを得ない。・・・大勢は更に一転して今日の女子は最早自覚の域に入らんとして居る。先ず第一に女子は自己の力を以て生活する事が出来るという確信を得た、以前は女は親、夫、若しくは子に依って養はるる者と極って居たのに近頃になっては自分で働いて自分で食うと云う所謂生活の独立なる自覚に到達したのである。今日の学問を以て嫁入りの研きの為にする親もあるが又一方には何時迄親兄弟の世話に為らぬ様にとの考えで勉強する年若き婦人も少なくない。否或婦人はかよわき女の身であり乍ら弟に学資を貢いで勉学をさせて居る者さえある。かかる事は昔は全く無かった。若し強いて求むれば唯一ある、けれどもそれは恥ず可き方面のことである。女子が其身一つに萬事を引き受けて一家を支えて父母兄弟を養う如き美わしき話は欧米にも余り聞かない。ここは実に日本婦人の特色であって誠に賞讃す可き価値があるけれども此生活に対する自覚と共に弊害も又起こった。私は残念乍ら当今の婦人の間に一種厭うべき生意風の風がある事を認めざるを得ない自分

には教育もある理想もある自分の意見を立てて自由に行動をせなければならんと云う様な事を云って美しき我国婦人の特色を失くして了う者があるのは慨嘆の至である。此等の人は欧米の風を真似る積りかも知れぬがそれは間違いと云わなければならぬ。欧米婦人の行いは他の人として何等の自覚なきものは禍である。・・・」(『新女界』第1巻3号p.32-36、1909(明治42)年6月, 32-36頁。)

『新女界』主幹の海老名弾正の、女性の能力の覚醒と社会での実践を説く論調は、他の執筆者達にも通じるものであり、この婦人雑誌が、キリスト教の信仰を促すよりも、女性の啓蒙と高等な教育、そして欧米の女性に近づくよう促すものであったことは明らかである。

3-3. 『新女界』主筆：安井哲子の学歴・キャリアと主な論旨

安井哲子(てつ)は東京の士族の出身であり、東京女子師範学校入学後、組織改変により女子高等師範学校の第1回卒業生となった。卒業後は女子高等師範学校助教諭となり、イギリス留学を命じられる。ケンブリッジ大学で教育学を学び、オックスフォード大学で心理学を研究した。帰国後、女子高等師範学校教授兼舎監となった。当初はキリスト教に反感を抱いていたが、イギリス留学中に、欧米社会におけるキリスト教の教えの重要性を認識し、帰国後、本郷教会にて海老名弾正より洗礼を受けた。『新女界』創刊当時は、東京女子高等師範学校教授であったが、1918(大正7)年に、新渡戸稲造に請われて、東京女子大学学監となった。²⁷

『新女界』の主筆ではあったが、東京女子高等師範学校教授という立場からであろうか、教育に関する記事が多く、宗教に関するものは殆ど見られない。本来、その言動は地味であったといわれ、記事も特段、女性を覚醒するようなものではなく、啓蒙というよりは常識的な教訓といったものが多いという特徴をもっていた。以下は『新女界』創刊号に掲載された安井哲子(てつ)の記事である。

「現代婦人の修養」：安井哲子

「孔雀の真似をした鳥の話は、実に現代我国婦人の状態を表わして居ると思います。・・・蓋現時の教育は外形的に傾いて、精神の少ない様に思われる。教育者自身も如何に女子を教育せんとするかに就いて余り明らかな理想を有たず、父母も亦其女の教育に就いて確かな主義を抱かせぬ者が多

²⁷ 青山なお『安井てつ伝』岩波書店, 1949年。

いのではあるまいか。……」(『新女界』第1巻1号、1909(明治42)年4月、3-4頁。)

3-4. 『新女界』女子教育関係者たちの学歴とキャリアおよびその論旨

安井哲子と同じく東京女子高等師範学校教授の宮川壽美子(スミ)も重要な執筆者であった。宮川壽美子は、長崎で幕末期にグラバーに仕え後に宮内省大膳職に転じた父のもとで育ち、東京に出て東洋英和女学校で学び、女子高等師範学校を卒業後、文部省の命でイギリスへ留学、帰国後は女子高等師範学校教授となった。富士見町教会長老陸軍主計監(少将)大江玄寿と結婚して大江寿美子(スミ)となり、東京家政学院を設立した。日本における家政学の導入に功績があった。²⁸

「家庭における精神教育」：宮川壽美子 英国家庭の礼拝

一国は一家の集まりで、各々善き家庭が集まってこそ、善き国が出来る訳であります。英国等の如く立派な国になるには、各一家に善良の点がなければなりません。……総ての家庭という訳ではありませんけれども、大部分の清き家庭で、両親が大概宗教家で、其内には家庭の祈祷会というものがあり……此祈祷会は中々力のあるもので、……自ら怠った心も直す事が御座います。

我国家庭の美風

右の如く彼の国にては幼少の頃から、自分より上の人格を手本とするという習慣を養います。……日本の家庭も昔より母親が非常にしっかりして、舅姑の為には己の快樂も犠牲にして、言い度き事も言わずして暮らして居ます。……其上我国には仏壇というもの、即ち先祖の位牌をまつという事あり、老父母は灯明をあげて拝し、珍しき者は第一に先祖に捧げ、新しき着物を着て外出せんとする時は、先祖に御辞儀をして出て行くという習慣がありました為め、常に先祖の名を辱しめぬという事が、頭の中に浸み込みますからそれで日本は強いという訳であります。

斯う考えますと、東西を問わず、精神教育は大切に、併かも家庭で養成されるという事は、子供の時からでありますから、実に強大なる力あります。……何処の家庭を見ましても、母親のしっかりした内は、何れも榮えて居ります。又たとえ

少々無学でもそうで御座います。

女子教育の眼目

……斯う考えますと、中々に女子教育は楽な事を貪って浮いた考えを持つ様に育ててはなりません。前述の如く極めて真面目に精神修養を怠らず、一家を治むる間に子女をして他日成長し、社会の一員となるに当たり、如何なる場合にも境遇を支配して行く事の出来る様、常に家庭で以て活きたる模範により健全なる思想を養成せねばなりません。今や日本は国力を増進し、世界に発展せんとして居ますが、それには斯る真面目の考えを以て、真実に子供を教育する様に、先ず婦人がならなければ立派になる事は出来ませぬ。(『新女界』第1巻1号、1909(明治42)年4月、14-16頁。)

安井哲子、宮川壽美子に加えて、特筆すべきは本郷教会会員の女子高等師範学校卒業生たちの存在であった。特に安井哲子、小川(塚本)はま、野口幽香子などは、女子高等師範学校の第1期生であった。塚本はまは、後に青山女学院教頭となり、青山女学院の発展に寄与した。必然的に女子高等教育に関する記事が多く取り上げられ、また、女子専門学校の創設記事や成瀬仁蔵、麻生正蔵、新渡戸稲造、二階堂とくよ、三輪田真佐子、宮田脩、小此木まつ子らによる、女子教育に関する記事が多数組まれている²⁹ことから、この雑誌が、当時としては極めて高学歴の女性を対象とし、高等教育を強く志向して、広く海外の教育事情を紹介している点では、他の婦人雑誌とは趣を異にしていた。

3-5. 女子学院関係者：三谷民子の学歴とキャリア³⁰

三谷民子は、京都府与謝郡に生まれた。造り酒屋であった父が、海外事業の展開のために、民子を東京の女子ミッション・スクールの婦人宣教師に託そうと、女子学院の前身の一つである桜井女学校に入学させ、1990(明治23)年に民子は女子学院第1期生として卒業した。在学中に私費留学の予定が、父の絹貿易の船が沈没したことにより実現はしなかったものの、卒業後に米国ノースフィールド大学に留学し、帰国後は女子学院で教鞭をとった。後に矢嶋楯子のあとを受け、女子学院の校長として活躍するのであるが、イギリスのオックスフォード大学に留学後、1927(昭和2)年からは女子学院院長に就任して国内外で活躍した。私費留学の扱いでアメリカ、イギリスなどへの留学の機会を提供していたのがミッ

²⁸ 日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988年、211頁。

²⁹ 佐々木啓子「進学名門校「女子ミッション・スクール」の歴史社会学的分析—都市市民層の教育期待に着目して」『日本教育社会学会第68回大会発表要旨集録』2016年、12-13頁。

³⁰ 大濱徹也、女子学院史編纂委員会編『女子学院の歴史』女子学院、1985年、「三谷民子」編纂委員会編『三谷民子』女子学院同窓会、1991年。

ジョン・スクールと教会であった。三谷もまた『新女界』の主要な執筆者であった。

3-6. 『新女界』夫人執筆者たちの経歴と論旨

海老名みや子と安井てつが、毎号、巻頭言など主要な記事を執筆し中心的役割をはたしたが、『新女界』は『新人』執筆者の夫人たちが記事を書き、時には夫妻で執筆するなど、女性たちに執筆の機会を与え、その能力開発の役割を果たしたといえよう。『新女界』には多くの女性たちが記事を寄せている。同じ時代の他の婦人雑誌では名望家夫人、政治家夫人などの記事が多くみられるが、『新女界』では、教育家、教師（非常勤を含む）、帝国大学教授夫人、医学博士夫人、牧師夫人など、知的階級の夫人たちが主な執筆者となっている。その記事からは、生活は質素であるが、子弟の教育には熱心で向上心、儉約、努力主義、博愛、平等感を読み取ることができる。

以下は、『新女界』でも執筆回数が多く、また特徴的な記事を掲載していた夫人たちの、題目の一覧である。

(表3)

志立たき子（日本銀行勤務 志立鉄太郎夫人、福澤諭吉の四女） 「わが受洗に就いて」「わが父の遺訓（身に沁みたる親の躰け その四）」「英国より帰りて」「子女教育に対する私の実験」「小児は如何にして育つべきか」【特集】新しき母の意見「日本の社会及び家庭の子女智育に対する誤解」「私は何故に娘を英国で教育するか」【特集】小児の宗教教育問題「子供の宗教教育に就いて」「我国の婦人に対する希望」「非難の多い日本婦人」「日本の婦人は何故発達せざるか」「婦人の服装について」「母親の保護」
井深花子（明治学院総理 井深樞之助夫人） 【家庭】「幼児の宗教教育（日曜学校について）」「婦人は太陽の如くあれ」【特集】諸方面より母親に「女学校より母親へ」【特集】様々な生活の一日「(七) 三日は主婦三日は教師」「避暑にいく人に」【新しき母の意見】「私は社会の制裁を作る為に『すべからず』主義を叫びたい」「思いつく事ども」「手軽なお料理の話」「降誕祭を迎えんとして」
元良よね子（東京帝国大学教授 元良勇次郎夫人） 「子供教育の葉」「日記の効を知りたる私の実験」「総ての土台なる頭脳を養う事が肝要」「弱い意志」「郊外の主婦生活」「惨ましき戦争」その他、思うがまま、雑感、等の記事は省略
某夫人（牧師 金森通倫夫人、金森小壽）女子高等師範学校・東京音楽学校など非常勤講師 【特集】子供に小使をやる可否と其注意「子供の性質を考えて遣る」 【家庭】「質素な学校」 【家庭】「高等教育を受けさせたい」 【家庭】改良すべき事（1）来客及び訪問に就いて「一風違った私の主義」

4. 明治後期から大正初期における学校選択の問題

『新女界』執筆者たちの、当時としては際立った高学

歴は、進学や学校選択などの教育関連記事とともに、読者に大きな影響を与えたと思われる。なかでも、子女の学校選択の問題では、読者が女性、あるいは高等女学校、女子師範学校生徒であることを想定して、上級学校への進学や海外の学校を紹介し、また、幼い子どもを持つ母親に対しては、小学校選択の記事が組まれることとなる。毎年2月から3月には、決まって学校選択がテーマとなっている。こうした記事構成が、『新女界』が単なる婦人雑誌ではなく、<教育の雑誌>という評価につながったものと思われる。

4-1. 明治後期の『新女界』【家庭】欄にみられる子女の学校選択記事

教育者であった向軍治は、1911（明治44）年の『新女界』で小学校教育から中学校受験、さらには女子教育に関して、我が子の教育問題として以下のような記事を執筆している。

「学校選択」：向軍治

父兄の責任：学校の選択という事を論ずる前に、父母兄長の責任を論ぜねばならぬ。今の世ほど、指定の教育に無頓着なものはあるまい。今の学校ほど困ったものはない。教師の力が薄い。教科書がわるい。教授法がゆき届かない。学生の個性が、全く無視せられて居る。其の原因には、金がないということもあろう。人が居らぬという事もあろうが、大なる原因の一つは、父兄が無頓着なという事にある。・・・ここに於て子女の教育に関する父兄の責任は、ただに学校の選択のみに止まらず、子弟の教育全部にむかって、今一層大に力を尽くす必要がある。

学校の欠点：学校の良否は、父兄よりも子供の方がよく知って居る。・・・幸い麻布には、弟が居り麻布小学校という古い小学校があり、近所に教会もあったからである。然るに、半年許り経た後、子供の学力が、余程落ちたのに気がついて、よく調べてみると、学校が悪いのであるという事が分って、俄に転宅の必要を感じた。私には子供が六人ある。・・・学校と教会とに近い処に家をもつ事にして居る。幸いに麹町には番町小学校と、教会が近所にあるのとて、六七年前から麹町に住っている。総領の娘は只今、矢島女史の監督せらるる女子学院へ通学中であるが、弟妹の成績の悪いのを見る度毎に、私が居る時は、番町小学校はいい学校であったが、校長が代わってから段々悪くなったなどと云う。・・・私の兄は中学校長であるが、校長自分が学校の授業のみでは上級の学校に入学するに、必要な、充分の力がつかない

という事を自覚して、そんな子供には課外に勉強させて居る。私も今中学生の補習を二三人頼まれて居る。その学生は俊才であるが、学校の教育が不完全な為め、生まれつかない鈍物になっている。これを生まれつきの知恵に回復させるだけに、どれ位骨が折れるか知れない。小学校でも中学でも学校のみで頼んで置いたならば、充分でないとは情けないわけではあるまいか。然し、此の事を知って居る父兄が、世間に幾人あるだろうか。……。

外国語の奨励：文明の国で日本国程、国語、国文の整理のゆき届かない国はない。西洋では国語国文は教育の重要な道具になって、個人性、国民性等を發達させる為の殆ど唯一の武器になって居る……。何しろ過去の国語国文は、世界的の智識、理想を養成せしむるには殆ど功能がない以上は、涙をふるっても今日の子女に向かって、外国語の勉強を奨励せねばならぬ。……他の諸学科は犠牲にしても、外国語の勉強に便利な学校を選ぶと云う事がただに、子女個人の為めのみならず国家の為に、必要なことである。

女子学院：右の理由からして私は、女の子を、女子学院に通学させるのである。……学科に於いては世界の進歩と、歩調を合して居る教育、殊に良妻賢母となるに必要欠くべからざる外国語を重んずる教育を受けさせたい。……東京市中高等女学校は随分多いが、此の三個の個條を具備した学校は、宗教家の建てて居る学校、あるいは私立学校の他には全くないと云うても差し支えない。ここに於て私は女子学院を選んだのである。……矢島女史は、文部の束縛を受けなければ、文部から認可を呉れないとならば、何も認可をもらう必要はない。自己に一個の主義があつて此の主義を貫かんとすればこそ学校もたてている。主義をまず放棄するほどなら、学校を廃めた方が早い。……」(『新女界』第3巻3号, 1911(明治44)年3月, 33頁。)

この記事から推測されるのは、初等教育就学率が90%を超えた明治末期ではあるが、その教育内容や教師のレベルなどが、十分とはいえない状態であったということである。そうした教育事情から見えてくるのは、学区内の指定された公立の学校ではなく、官立の師範学校附属小学校に殺到する中上流階級や知識人層の家庭の母親たちの姿であった。大正初期には、師範学校附属小学校に加えて、私立の小学校や中学校、女学校に通わせる家庭も、東京では見られるようになり、慶應義塾幼稚舎、

日本女子大学附属豊明小学校、成城小学校、東洋英和女学校などの有名私立小学校では、入学倍率が5倍を超えることもあった。³¹ また、中学校でも東京府立第一中学校の競争率が高くなると、競争を避けて私立の麻布中学校や暁星中学校などに進学させる知識人層が出現するようになる。こうした受験情報が、本郷教会関係者たちの限られたメディアであった『新女界』の記事のなかで共有されていったのである。以下は、本郷教会会員で牧師夫人でもあった、ある母親の記事である。

「質素な学校」：某夫人

「私の宅では、偏僻でございまして、何分、通学にて不便で御座いますところから、いろいろ考えました末、女子学院にお願いすることにいたしました。同校は宗教主義の学校で御座いますし、且つは、先生方におちかづきも御座いますし、極かたは、質素な大丈夫な処があると存じまして入学させましたので御座います。……入学致させまして以来、私は、まだ、学校に対して不満足に感じた事は御座いませぬ。よく、女学校へ出すと、どんな着物でなくては、学校へゆけぬの、こんな袴、あんまりほんともむずかしくて困るというような事を聞きますが、女子学院では、既に、絹布を着けたり、あまり、目にたつりほんをかけたりする事は禁じられて居ります。……宗教を土台として御座いますから、精神修養の点など、よほど、進んで居るように思われます。その上普通科を終りましてから、更に進んで勉強したい人の為には、高等科が御座いまして、誠に都合がよいと存じます。」

(『新女界』第3巻3号, 1911(明治44)年3月, 41頁。)

以下は匿名での執筆である。

「行き届いた学校」：某高等官

「女子教育の方針は、よほど考え物ですね。……日本婦人の従来の美点を、あくまでも尊重して之を損じないように、そして、よく文明の知識を消化せしむる事が、最大切でしょう。私の娘は、成女高等女学校へ入学させました。同校長の宮田さんが、大層熱心な方で、校風が、至極質実で、今様の軽浮な処が少しもない、のみならず教授が、非常に、ゆき届いて居るという事を聞いて、甚だたのもしく思うて、入学させたのです。……入学前に聞いた評は、過称ではないようです。至極、

³¹ 小針誠『<お受験>の社会史』世織書房, 2009年。

真面目で、衣服なども質素なものです。】(『新女界』第3巻3号、1911(明治44)年3月、42頁。)

官僚や某夫人(牧師夫人であるが、東京女子高等師範学校の非常勤講師も務める)などの知的な都市市民層にとって、公立の学校よりも、校長の教育理念や教育方針がしっかりした学校を我が子のために選択する傾向がすでに明治末期から大正初期に見られたのであった。

4-2. 大正初期の「学校選択」問題について

大正期に入ると、上級学校への進学に有利な師範学校や私立大学の附属小学校が選択されるようになっていく。『新女界』では東京師範学校附属小学校の教員や著名な小学校教員の記事も掲載されるようになる。以下の記事の執筆者である高島平八郎は、教育家としては正系のキャリアではないものの、東京師範学校附属小学校や日本女子大学などでも教鞭をとっていた、当時としては著名な教育者であった。そうした立場から、師範学校附属小学校でなければならぬという親に対して、以下のような苦言を呈している。

「子供を小学校に入学せしむる父母の為に」：高島平八郎

「・・・入学に就いても・・・東京の如く多くの種類の学校のある所では、子供の性質身体の具合などを考えて選択する必要がある。・・・官立の附属小学校其他特別に学者を造る目的で、小学校時代から程度の高い教育を施す小学校などに、平凡の頭の子供を入れると、たとえ入学は出来ても後で非常に苦しみ、而かも親は度々注意を受ける事になり、家庭でも復習をさすなど益々子供を苦しめるやうになる。・・・子供の通学は三十分以内で行ける所はなるべく日々歩かす方がよいのである。富豪の子弟といえども車で送り迎えをさしたり書生や下女をつけてやる事は絶体に禁ずる事が子供の為に学校の為にも必要であると思う。・・・」

(『新女界』第8巻3号、1916(大正5)年3月、11頁。)

こうした記事が掲載されたということは、『新女界』読者のなかにも、何としても師範学校附属に入学させたいという親がいたということであろう。次第に『新女界』でも学校選択の問題を特集記事にする必要性が生じてきたと思われる。

4-3. 「巻頭言」にみられる学校選択記事

大正期になると、決まって受験シーズンには、学校選択の特集記事が組まれるようになり、編集者としての見解も述べられるようになる。こうして学校選択問題は『新女界』としても看過できない問題となってくるのである。

「学校選定に就いて」：編集者

「親も子も頭を悩ます学校選定の時期が参りました。学齢児童のある家には、何所そこの小学校に入学せしむる様にと区役所から指定して来ても、大切な子供を初めて社会の風にあてることでありますから、よい上にもよかれと願う親心は指定学校に満足せずして、市内に僅か数個の小学校に目星をつけて出願の日を待つのですから、掲示が出たかと思うともう人員超過十数倍といった様な有様です。そこで学校は止むを得ず何様かの方法を以て定員丈をとることになりますから、或る学校では半ばは抽籤ではねて了い、その残を検査とって、体格や能力をためして弱者はずん、はねられて強者丈がとられることになります。此烈しい競争の現状を見ます時には実に涙を催さずにはいられません。・・・学校選定の範囲を成るべく廣くすることです。例えば兄弟の中の二人が附属に入学出来たので他の子供も附属でなければならぬことの様に、又附属以外の学校は一段下で、もあるかの様にいいはやして又そう思って志望しても若し其望みがはずれた時は、それこそ失望です。・・・極りきったよい学校の外にもぜひ分特色をもつ私立学校がある事を忘れてはなりません。例えばある小学校の如きは一学年から外国語を教へるなどという様なことは其子に対する親の希望の如何によっては誠に面白いと思いません、其他校長の一つの主義理想の元に訓練を受けることもよいことであると思えます。・・・女学校、中学校の選定も此心がけが必要であると思えます。・・・学校の先生方も某学校の入学試験を是非受けろとお勧めになって所謂試験勉強に先生も一生懸命骨折って下さるのは誠に有難いことではありますが、その為女の児などは非常に神経過敏になってともすると健康を傷けんとする憂があるかのようにきゝますが誠に痛心なことであると思えます。・・・」(『新女界』第9巻2号、1917(大正6)年2月、2頁。)

5. 『新女界』の女子高等教育観、職業観と婦人解放について

これまで述べてきたように『新女界』が、女性に対し

て極めて高等な教育を求めていたことは、主筆を東京女子高等師範学校教授が務めていたこと、そしてその創刊と終刊が、日本の女子高等教育の形成過程でいえば、ある区切りの時期であることと無関係ではない。『新女界』における女子高等教育に関する記事は、明治期には先進的女子教育論として論じられているが、大正期に入ってから、特に日本における本格的な女子のための大学として東京女子大学の創設がほぼ確定されていたこともあり、『新女界』のなかでは、これからの女性には女子高等教育は当然受けるべき教育として論じられるようになる。以下に、女子高等教育に関する記事をいくつかまとめておきたい。

「女子の高等教育について」：文学博士 元良勇次郎

「吾国の女子に高等の教育が必要なることは既に古い問題であるに係らず、今尚往々世人の誤解を招き其の効果に疑を挟む者が少なくないようである。併し余は廣く之を言えば女子にも高等教育はなくてはならぬと思う。……現時吾国の中流以上の家庭の女子には、概して高等教育をうけさせることが必要と思う。……外国のカレッジなどは吾国の高等女学校程度の上に少なくとも三四年加へた様なものであると思う。……高等教育は高等教育で、何処迄も人として知識の啓発人格の養成を女子にも必要とするのである。……」(『新女界』第1巻6号、1909(明治42)年6月、7-8頁。)

「米国男女学生々活」：理科大学講師 哲学博士 谷津直秀

「男女共学コオエデュケーション：米国の女子は高等女学校を卒業すると、大抵カレッジに入る。今から二三十年前頃高等女学校に入る数位の女子が、今日ではカレッジに入るそうである。詰まり中流社会の女子はカレッジ教育を受けるのが一般の習である。……カレッジ教育は吾国の高等学校、女子大学の様なもので、高等女学校の教育程度を高くしたものに過ぎない。
ハイスクール高等女学校では拉典語や、希臘語は僅かに其初歩をやるが、カレッジになると古典文学の研究をする。米国学生の気風が一体に迫らず典雅な点のあるのは此古典文学の影響であるまいかと思われる。……カレッジで男女共学コオエデュケーションをして居るのは、東部には少ないが多くは米国の西部に行われて居る。……男女共学の学校では、大概女子の方が成績勝って居る。……」(『新女界』第1巻6号、1909(明治42)年6月、15-18頁)

「欧米に於ける女子教育の現状」東京女子高等師範学校教授 文学士 雀部顯宣

「私の見る所を以てすれば、現今世界の中、教育制度の発達したる点に於いて米国は第一等に位する国であると思います。……そして御承知の通り米国は男女共同教育でありまして……西部の諸大学を見ましたが、何れも男子と同様に文学哲学は固より、理化数学其他の諸科に至るまで、男子と席をおなじくして熱心にやっています。……ボストンの近郊にあるウェルズレー、カレッジ……其他コロンビア大学の教授達の経営するチャーチス・カレッジ、マウント・ホリヨークのスミス・カレッジ……英国ではオックスフォードに暫く滞在いたしました。……米国人が内職をしても子供に高等の教育を授けねばならぬと云う意気込みとは大なる相違で……独逸は唯今の処は寧ろ建設時代で、女子高等教育の如きは将来は知らず現今に於いては見るに足るべきものは少ないが、師範学校教育は非常に発展して居るので、此点是世界に於いて第一等であると思うのであります。」(『新女界』第4巻4号、1912(明治45)年4月、16-21頁。談話筆記、文責記者)

さらに、吉野作造とならんで『新女界』のオピニオンリーダーであった内ヶ崎作三郎は、西欧の婦人解放と高等教育の関係について、以下のように論じている。

「婦人解放問題の真意義」：東京専門学校(早稲田大学)教授 内ヶ崎作三郎

女子高等教育問題

「……女子の高等教育は、欧州に於いても十九世紀以前までは決して左程進んでいたとは云えない。……今日に至るまで牛津(オックスフォード)や劍橋(ケンブリッジ)の両大学などでは、講座に列することは出来るが、学位はくれぬと云っている。併しロンドンやマンチェスターや、エデンボロやグラスゴー等の諸大学では女子にも学位をやるのである。兎に角今日欧州の婦人は実に盛んな威勢である。一昨年の夏オックスフォード大学にユニバーシティー、エキステンションの夏期学校があった。これは「世界に於ける伊太利の地位」と題する問題で英国屈指の学者達が、宗教、文芸、芸術、政治経済、社会等の有らゆる方面から、伊太利に就ての研究の発表であったが、出席者総数千八百人中、婦人は千三百人で、中には妙齡の女子もあれば、六七十の老も媼も居ったが、熱心にノートに叩へたりなんかして居ることなどは、彼等が如何に研究の精神に富んでおるかが分る。……」

之が欧州に於いて婦人解放問題の起り来た原因である。日本婦人の智識の程度低きは婦人雑誌を一見しても分る。見よ滔々たる婦人雑誌、何たるさまぞ。其の思想の幼稚なる甚しいものが多い。今や日本の女子高等教育問題は陸海軍問題よりも重大なる問題である。」(『新女界』第3巻11号、1911(明治44)年11月、15-21頁。)

6. 時代は特に如何なる点に婦人の教養を要望(終刊特集)

1919(大正8)年2月、『新女界』はついに終刊を迎えた。主筆であった安井哲子(てつ)が、東京女子大学の学監となったことで、多忙さのため執筆が困難になったことと、主幹の海老名弾正・みや夫人が渡欧することとなり、実質の存続が困難であったことと、さらには『新女界』における女性の覚醒という役割も女性に限定されるものでなく、男女同権という立場から、ふたたび『新人』に吸収合併されることが理由としてあげられる。³² その最終号では特集記事が組まれた。その題目が「時代は特に如何なる点に婦人の教養を要望」であった。10年間、『新女界』のオピニオン・リーダーであった者たちが筆を振っている。主な執筆者の記事を以下に抜粋して引用した。(原文と同様「いろは」順)

帆足理一郎(東京専門学校(早稲大学)教授)

「……少なくとも現在の私立大学即ち一般高等教育を修むる学芸大学を解放して、自由に婦人の入学を歓迎すべきである。……」

吉野作造(東京帝国大学教授)

「女子教育といって何も女子の教育を男子のそれと区別する必要がないと思う。……学校はもっと専門的な教養を授くる必要がある。そうして男女の教育を平等ならしむべきは素より論を俟たない。……もっと『聡明になれ』と云うことである……。」

内ヶ崎作三郎(東京専門学校(早稲田大学)教授)

「……しかし今日の中流階級の経済的背景がもう一層強くあらねば駄目です。……又、少数の選ばれたる婦人には、国際意識の教養が大切と存じます。此の意味に於いて海老名夫人の巴里行に多大なる敬意をささげます。」

野口末彦(牧師)

「……家庭に於ける教育、道徳に階級の差なく、親子兄弟、姉妹、主従、皆平等に道を踏み、デモクラシイの本義を發揮する必要あり。」

相原一郎介(文学士)

「……従来の女子教育に就いては、余りに部分的皮相的で、頭を作るということに力は這入って居らなかったと思ふ。……男子の立場より見たる良妻賢母でなく、廣い人生から見た徹底した良婦を養ふべしである。具体的に言えば今の高女では低い、もっと一般に高める必要がある。」

有田四郎(画家)

「総ての問題に対する完全なる理解と見識、同時にあくまで柔和にして優美なる婦人美を失わざらんこと。……」

海老名弾正(本郷教会牧師)

「……今や時代は婦人に盲目的な生活をするを許さない。社会的に国家的に世界的に覚醒することを要求する。……女子は常に男子の尊敬に値するものでなくてはならぬ。徒に従順を以って最高婦徳をせしむるが如きは断じて女子の純性を發揮せしむる所以ではない。」(『新女界』第11巻2号、1919(大正8)年2月、32-36頁。)

7. 『新女界』読者からの投稿

最後に、読者からの投稿文(「読者の領分」)を紹介しよう。一人はキリスト教者と思われる。おそらくは教会のネットワークで、息子を福岡大学(九州帝国大学医学部の前身である福岡医科大学と推測される)の医学博士宅に預けた、ある母親の投稿文である。

読者の領分 「母の感謝：長崎一読者」

「思い出多き大正二年の秋、私は一子を福岡大学の某医学博士のお宅へお預けして此地の〇〇(原文のママ)女学校に奉職することとなりました。早くも父を失って此母が手一つに育てられし彼は十六年以來嘗て他人の味を知らず況して一人手放して遠く相去るなどは夢にも思はぬことでありました。如何に高德の先生御夫婦にお任せするとはいふものの果たして其の訓育を受け得るべき資格を有して居るやなどさて其場になって母のためらいは一通りではなかった。博士も夫人も共に打解けてお引受けした上は我子も同様のこと決して御心残りなく早く新なる使命に向へと仰って下さるので、私は無限の励ましと力を得て旅装を整へました、……奥様の細々と行届いた御手紙……又子供、彼自身の手紙にも、

³² 青木次彦『『新女界』解説・総目次』友愛書房、1975年、13-14頁。

お母さん此間から或書籍を拝借して読んでみましたらそれを先生が御覧になってそれはまだ少し早いから代わりにプルタークの英雄伝を読めと仰いました。僕はおもしろいから読んで了いたいと思っただけで先生の命令通りに途中でやめました。先生の仰ることに悪いことはありませんから。

私は此手紙を得て何ともしれず感謝の念がわいて心行く許り神様にお祈りを申しました。

・・・このお宅には十一才を首に五人のお子さんがいられます・・・こうしたお優しい中に如何にも行届いた底力のある御教育ぶりだもの、不束なる自分の子供でも人間らしい人間にならないで何としましようかと、そうして私は二年前非常なる躊躇の中にも一大決心を以て、自分の子供をかかるとお宅の一員に加えて頂いたことを衷心より感謝して今も日毎の義務に励んでいます。」(『新女界』第8巻3号、1916(大正5)年3月、69-70頁。)

次の投稿文は、地方在住の女学生と思われる。期末試験の準備に忙しいなかでも一息に読んでしまったようである。

読者の領分 「気持ちのよい雑誌：愛子」

「新女界をお送り下さいまして誠にありがとうございました。早速何かも打ちやっで一息に読みましたが、何となしに他の雑誌などとその接した時の気分が違います。一種うに云われぬ或ものが流れているのが味わえます。・・・精神生活内生活に重きを置く私等にはわけて諸先生の心からの叫びに接して無限の力を與えられます。何というしんみりした気持ちのよい雑誌でしょう。私も早試験でその準備に忙殺されています。三月十五日には終わりますからそしたら一度ゆっくり書きます。」(『新女界』第8巻3号、1916(大正5)年3月、70頁。)

『新女界』には、この女学生のほかに、女子高等師範学校の寮に暮らす女子学生の生活も記事となっている。他の婦人雑誌と同様、一定の女学生の読者がいたものと思われる。

8. まとめと今後の課題

本研究において、『新女界』の執筆者や読者の投稿文を分析し、知識人層の女子教育観や職業観そして学校選

択の問題を明らかにした。明治初期に萌芽したと思われるキリスト教関係者の、学歴と経歴、キャリアの分析からすれば、極めて高学歴層が、本郷教会関係者として『新女界』の刊行に係わっており、そこから、さらに彼らとその家族を巻き込んだコミュニティーが形成されていたことがうかがえるのである。『新女界』と本郷教会、その関係者たちは、その後、日本の政界、経済界、文化界において主導的な役割を担い、後進への影響力が極めて大きい人々であった。その共有する連帯感の構成要素となっているのは、前近代の身分や出自や属性ではなく、獲得された教養や文化であり、そこに学校の価値が持ち込まれて「学校界」が形成されていったであろう。日本における西欧的教養の歴史は浅く、何世代にわたっての継承が行われていない。したがって地方出身者や比較的低い階層の出身者であっても、近代学校の学歴によって知識人として認知されること、さらには留学という手段によって、階級文化を飛び越えることも可能であった。その一つの契機となるのが、こうしたコミュニティーで繰り上げられた、低年齢からの学校選択であった。

今後の課題としては、さらに『新女界』の教育関係者の記事を詳細に分析するとともに、知識人たちが公立以外のもう一つの選択肢として選んだ学校、すなわち師範学校附属小学校やミッション・スクールなどの私学であるが、そうした学校を中心とする、戦前期日本の知識人たちの学校を「界」(P. プルデュー『国家貴族』)³³とするコミュニティーの形成と、その内実を実証的に明らかにしていきたいと考える。

【参考文献】

- ・『新女界』(創刊～第11巻2号) 新人社, 1909～1919(明治42-大正8)年。
- ・青木次彦『「新女界」執筆者索引、解説・総目次』友愛書房, 1975年。
- ・青山なお『安井てつ伝』岩波書店, 1949年。
- ・大濱徹也, 女子学院史編纂委員会編『女子学院の歴史』女子学院, 1985年。
- ・岡田章子『「女学雑誌」と欧化』森話社, 2013年。
- ・近代女性文化史研究会編『大正期の女性雑誌』大空社, 1996年。
- ・近代女性文化史研究会編『婦人雑誌の夜明け』大空社, 1989年。
- ・小針誠『<お受験>の社会史』世織書房, 2009年。
- ・——『<お受験>の歴史学』講談社選書メチエ, 2015年。
- ・小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師-来日の背景とその影響』東京大学出版会, 1992年。
- ・佐々木啓子『戦前期女子高等教育の量的拡大過程』東京大学出版会, 2002年。

³³ P. プルデュー/立花英裕訳『国家貴族』I, II, 藤原書店, 2012年。

- ・ ——— 「戦前期女子ミッション・スクールの進学構造」『日本教育社会学会第56回大会発表要旨集録』, 2004年, 310-311頁。
- ・ ——— 「近代日本における都市中上流階級の階層文化と教育」『電気通信大学紀要』第24巻第40号, 2012年, 19-29頁。
- ・ ——— 「女子ミッション・スクール生徒の居住地および家族の学歴と職業からみる階層文化の形成過程」『日本教育社会学会第65回大会発表要旨集録』2013年, 304-305頁。
- ・ ——— 「進学名門校「女子ミッション・スクール」の歴史社会的分析—都市市民層の教育期待に着目して—」『日本教育社会学会第68回大会発表要旨集録』2016年, 12-13頁。
- ・ 手塚晃, 国立教育会館編『幕末明治 海外渡航者総覧』第1, 2, 3巻, 柏書房, 1992年。
- ・ 同志社大学人文科学研究所編『「新人」「新女界」の研究』人文書院, 1999年。
- ・ 日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館, 1988年。
- ・ 日本組合本郷基督教会編纂『本郷教会創立五十年』日本組合本郷基督教会, 1936年。
- ・ 「三谷民子」編纂委員会編『三谷民子』女子学院, 1991年。
- ・ 弓町本郷教会百年史委員会『弓町本郷教会百年史』日本基督教団弓町本郷教会, 1986年。
- ・ Libra, Takie Sugiyama, 1993, 竹内洋他訳『近代日本の上流階級』世界思想社, 2000年。

acknowledgement

- * 本論文は、2016年9月17日開催の日本教育社会学会第68回大会発表要旨集録に掲載の要旨の一部をもとに、さらに広範に資料を収集して分析し、異なるテーマで構成したものである。なお、同要旨からの引用については、脚注に引用箇所を明記し、参考文献にも示している。
- * 本論文には科学研究費補助金研究「近代日本における都市上層・新中間層の階層文化と教育の実証的研究」(課題番号185306605001)の成果の一部が含まれる。